

常山紀談

十三

圖 番 號	21 號
種 別	國
種 番 號	32, 22 號
日 入	月 日

919.5
338
Vol. 13



常山紀談卷之十三目次

一 采田助右衛門見積の事

一 後藤又兵衛決断の事

一 合渡川合戦黒田三左衛門毛付の功名の事

一 神谷小介先登の事

一 藤堂玄蕃赤坂町を信じる事

一 寺沢廣高加藤嘉明度量の事

一 春日九兵衛見積の事

一 村上彦右衛門先見の事

一 土方三九郎武功の事

一 小栗又市谷々見廻の事

秀家夜討せんといふ事

株瀬川合戦の事

稲次右近功名の事

浅香庄次郎働の事

林半介殿の事

伊藤金左衛門三宅平大夫後殿の事

毛屋主水物見の事

関ヶ原合戦嶋左近討死の事

飯尾甚大夫一騎先死の事 附 成合平左衛門が事

蒲生備中父子戦死の事

大谷吉隆平塚為廣宸後合戦和歌贈答の事

瀧川内記功名の事

本多正重の事

梶左馬助御書を認る事

田邊甚兵衛幼年功名の事

辻小作中黒道随が事

鳴津義弘関ヶ原退口の事 附 大坂の商賈義氣の事

東照宮勝鬨の儀を延多ひの事



常山紀談卷之十三

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○岐阜の城攻キヤフ細川忠興ホリカハタケ七曲口ナナマヅリへ向ムカひしよヨネダ采田助右衛門あ

まごのくくの門カド矢倉ヤクラハちとやすく打破ウツるべしとや忠興子

細サイハいふ采田ヨネダ今勢イマセより矢倉ヤクラより持ツチ出デた箭ヤ玉タマ次等シナウより少コく

やうりハ本丸ホンマルへ引入イりしゆゆ急イソむんとや甘アマばやどて置スを進スた

て七曲口ナナマヅリを攻破ウツらまじとま

○岐阜を攻破ウツる時黒田田中藤堂等の諸將シヨシヤウハ犬山イヌヤマを押オシへし

し小犬山の城明シコイヌヤマノシロのきりきりキリキリと岐阜キヤフを布フきし打向ウチムカふ所トコロは大

垣キより石田イシタ嶋津シマツ二万餘ニマンヨリの打ウチやぐわし来るキル頃コトしよ八月ハチグヒ雨アメ

の後ノチ合渡川カワト水ミヅをミ増マすしり諸將シヨシヤウ香カウが嶋シマの札フシにソ辻ツギよひえ

て各将机^{オノオノ}に據^{ヨリ}て川を渡^{ワタ}り待^{マテ}てや戦^{タケ}ふと評定^{ヒヤウテイ}して決^ケ
せぬ高虎^{タカトラ}銀^{ギン}の天衝^{テンツキ}に立物^{タテモノ}打^{ウツ}つる曹^{カド}を忌^キ黒^{クロ}ちろ掛^{カケ}つる武
者^{ムロ}ハ黒田^{クロタ}家^ケ比^ヒ士^シ大将^{ゴトウ}後藤^{ゴトウ}又^{マタ}兵衛^{ヘイ}あるべし存^{ゾク}る旨^{ムネ}をいづるや
とて扇^{アキ}を揚^{アゲ}てまはらまうらば後藤^{ゴトウ}はらをゆるのけく
来^キて跪^{ヒツ}く高虎^{タカトラ}いうよ此^{コノ}川^{カハ}を渡^{ワタ}るべし待^{マテ}て利^リ有^{アル}べきと先^{サキ}
の程^{ホト}よりいづる決^ケせぬといまうらば後藤^{ゴトウ}打^{ウツ}笑^{ウツ}ひ評定^{ヒヤウテイ}も
時^{トキ}小^コよりい今日^{ケノヒ}岐阜^{ギフ}の城^{シロ}攻^クめ後^{ノチ}ましまる愛^{コイ}よく一^{イチ}戦^{セン}たふ
内^{ウチ}府^フは御^{ミコ}面^{メン}目^メハハまの川^{カハ}を討^{ウチ}死^シの場^バとまきとめられん事^{コト}
然^{シカ}るべしとていづるハ男子^{ナニシ}もくハハまのと大^{ダイ}言^{ゴン}まうらば諸^{シヨ}将^{ジョウ}
尤^{モトモ}たなりとて川^{カハ}を渡^{ワタ}りまきとめ

○合渡^{ガフツ}を渡^{ワタ}り時^{トキ}長政^{チカサダ}の士^シ大将^{ゴトウ}黒田^{クロタ}三^{サン}左^サ兵^{ヘイ}衛^{エイ}可^コ成^{セイ}川^{カハ}の東^{ヒガシ}より

遙^{トホ}く敵^{テキ}を見渡^{ミワタ}り長政^{チカサダ}のかへし馬^{ウマ}を乗^{ノリ}せ朱^{シュ}の枝^エ釣^{ツル}
のさし物^{モノ}指^{サシ}く思^{オモ}た馬^{ウマ}のさしとまげあるふまうらばよた
敵^{テキ}なり必^{カナラ}討^{ウチ}取^{トル}べしといふ長政^{チカサダ}勝^{シヨウ}敗^{バイ}ハ運^{ウネ}命^{メイ}よある事^{コト}なり
たのときやとて敵^{テキ}を討^{ウチ}べきまきとめといまうらば可^コ成^{セイ}耳^{ミミ}
よも聞^キ入^ケむ川^{カハ}は馬^{ウマ}を打^{ウツ}入^ケむ向^{ムカ}ひの岸^{キシ}よをせ上^{ウヘ}を逐^ツよめ
武者^{ムシヤ}を切^キつ落^{オチ}し首^{カビ}よさし拍^{ソク}を添^{ソベ}く得^エたりとて石^{イシ}田^タが物
ぬ村^{ムラ}山^{ヤマ}利^リ分^ベといへる剛^{ガウ}の者^{モノ}なり可^コ成^{セイ}が此^{コノ}功^{コウ}をむらう
毛^ケ付^{ツケ}の功^{コウ}名^ナとてまきとめいづるた譽^{ホニ}まきなり
○合^ガ渡^{フツ}の軍^{イクサ}よまきとめ内^{ウチ}神^{カミ}谷^ヤ小^コ分^ベ先^{サキ}がけし川^{カハ}を渡^{ワタ}り待^{マテ}
うけし敵^{テキ}中^{ナカ}よめめめめ入^ケりまきとめバ鎗^{ヤリ}よめめ揚^{アゲ}られ既^{スデ}
よ危^{アヤシ}なり時^{トキ}長政^{チカサダ}の軍^{イクサ}兵^{ヘイ}進^{シン}まかりとて敵^{テキ}を追^{オウ}つるれば

亦々流るゝ血は朱は深しを戸板は載く長政の前は来る
小ひより我と先を争はん者長政なすは有べしとせし
長政をまつと見て小ひより先立ち鎗を合せん老一人も
いひばと争ふまじ長政汝あはれで誰う先づけまじきまはれん
りの氣をさうりくおのハあきこといとまじきと小ひ後
有馬の温泉は浴して創愈なり

○合渡あはく東國方の軍北るを追て赤坂まで進みゆく時
高虎の士大將藤堂玄蕃赤坂の町口はかけ入大音あげ百姓
商人をたやまはしつゝ悪逆の輩を討平け静謐を
致さん為なり皆ちつともさわぐべしと觸通て其後
小家一ツ引壞ち東の方北町をさすあはく相圖の煙をた

○高虎大は悦んで傳へて古の王者は軍を學べる
玄蕃我とく其日暮らまじ唐冠の由を脱て懸へられぬ

○関ヶ原まじ 東照宮いまは岡の御陣ちた已お諸
大將地の利は據く面を陣取りしよは或夜諸陣儀はは
こがたり寺澤志摩守廣高臥ながく徐に我既にすしり

といひく斬かいく寝らまじり度高士六人歩の者六人
を扱多しは三番は互ふかまじり途を異し小の事を
必告来る今夜告来らまじり夜討まじり事をえより

○知らるゆはあり其あはる夜忍びく如藤嘉明の陣所
を通る者ありく忍びく火付り切く捨よといひ嘉
明其士八主君の為は死を顧む吾陣所の備怠くは彼は

見其て吾を窺ふべき殺と殺せしと勝敗ふかちらふべと
て追^{オヒ}たもあ^アし^シも^モこ^コり

○丸毛兵庫が弟春日九兵衛大坂より大垣に到り諸將の内

は二心ある人の陣所此有様必定味方敗北せし陣替せ

ら^ハま^マし^シの^ノく^ク三^{サン}成^{セイ}す^スも^モも^モ是^シを^ヲ用^{ヨウ}ひ^ヒび^ビ果^ハて^テ敗^{サイ}せ^セり

後^{ノチ}は^ハ前^{マヘ}田^タ利^リ長^{チヤウ}春^{ハル}日^{ニチ}を^ヲま^マり^リの^ノう^ウま^マら^ラし^シも^モ江^エ戸^ド駿^{スン}府^フを^ヲ弾^{ダン}

り^リは^ハあ^アる^ル事^{コト}は^ハし^シら^ラず^ズ京^{キヤウ}極^{キョク}若^{ニヤク}狭^{セキヤ}守^{シュ}高^{カウ}次^ジハ^ハ東^{トウ}照^{テウ}宮^{ミヤ}志^シ

婚^{コン}あ^アる^ルゆ^ユを^ヲよ^ヨ志^シひ^ヒく^ク乞^{コヒ}招^{ソウ}ま^マせ^セ禄^{ロク}千^{セン}石^{シヤク}よ^ヨる^ルべ^ベう^ウと^ト

の^ノ仰^{オウ}よ^ヨり^リて^テ京^{キヤウ}極^{キョク}家^ケは^ハ仕^シへ^ヘる^ル後^{ノチ}岡^{オウ}飛^ヒ弾^{ダン}と^トの^ノ同^{ドウ}哉^{サイ}中^{チュウ}

と^ト飛^ヒ弾^{ダン}が^ガ子^コな^ナり

○関ヶ原の時大坂北舟手村上彦右衛門菅平右衛門九月十二日

の^ノ夜^ヨ来^キ名^ナ小^コ忌^ジ十三^{ジュウサン}日^{ニチ}諸^{シュ}將^{シャウ}は^ハ對^{タイ}面^{メン}し^シ安^{アン}國^{コク}寺^ジは^ハ向^{ムカ}ひ^ヒて^テ味^ミ方^{ホウ}

陣^{ジン}所^{ショ}の^ノ体^{タイ}見^ミ及^キび^ビし^シる^ル心^{シン}得^{トク}ら^ラま^マし^シと^ト安^{アン}國^{コク}寺^ジ吾^ワも^モこ^コを^ヲ

と^トひ^ヒり^リへ^ヘし^シと^ト關^{ケン}東^{トウ}者^{モノ}一^{イツ}人^{ニン}こ^コ上^{カミ}方^{カタ}勢^{セイ}十^{ジュウ}人^{ニン}の^ノ積^{ツキ}と^トあ^アれ^レを^ヲ

四^シ五^ゴ日^{ニチ}め^メち^チこ^コと^トえ^エん^ンは^ハ必^{キツ}勝^{シヤウ}べ^ベし^シと^ト各^{カク}々^{カク}村^{ムラ}上^ノ味^ミ方^{ホウ}山^{ヤマ}ど

あ^アの^ノ有^ア様^{ヤウ}高^{タカ}く^クと^トり^リに^ニあ^アり^リま^マる^ルな^ナり^リ戦^{セン}ふ^フ色^{イロ}よ^ヨあ

ら^ラぶ^ブと^トく^ク下^{クハ}ア^アの^ノ事^{コト}も^モ吐^ツひ^ヒが^ガか^カん^ン東^{トウ}勢^{セイ}ハ^ハあ^アる^ル陣^{ジン}

所^{ショ}あ^アる^ルと^ト一^{イツ}兩^{リヤウ}日^{ニチ}を^ヲあ^アら^ラし^シて^テ合^{カウ}戦^{セン}あ^アる^ル覺^{カク}束^{ツク}な^ナり^リと^トい^イふ

と^ト歸^キり^リが^ガ果^ハし^シて^テ計^{ケイ}ア^アる^ル如^カし^シ村^{ムラ}上^ノハ^ハ敗^{ハイ}軍^{クン}の^ノ時^{トキ}阿^ア濃^{ノウ}陣^{ジン}

九^ク鬼^キ大^{ダイ}隅^ク守^{シュ}嘉^カ隆^{リヤウ}の^ノ許^{コト}よ^ヨり^リ夫^フより^リ上^ノ方^{ホウ}ハ^ハお^オり^リと^トい^イふ

○関ヶ原北軍の前有馬豊氏大垣と川を隔て陣せし小豊

氏^{ウヂ}の^ノ兵^{ヘイ}上^ノ方^{ホウ}三^{サン}九^ク郎^{リヤウ}を^ヲ始^{ハジ}十^{ジュウ}騎^キ川^{カハ}を^ヲ渉^{ワタ}り^リ敵^{テキ}少^{シウ}し^シと^トい^イふ

退^{タイ}す^スと^トい^イふ

立大垣の矢倉ヤクラ下シカに馬を立タテてあコエる名乗ナノリる者モノは
炮を携ウケカケへり三九郎左の肩先カササキより負テぬ續ツギく味方ミカタもな
らば十騎の老オシどももさズぶフと馬を引ヒキ返マゼりしと

東照宮トウショウミヤに召シ召シるなり

賞功シヤウコウにムナかりしハ土方ヒノカタ固本コホン於一石門イシカド渡辺ワタノヘ佐左ササ

上田丹波ウヘノタニハと言合イヒアハせ出奔シユボシしハ土方ヒノカタが養母ヨウボを百姓ヒヤクシヤウのもの

は隠カクしハ豊氏トヨウジ番人バンを付ケて守モらしめし

は三九郎サンクウロウ帰カりしハ養母ヨウボを人質ヒトジツにめし

かくの事をコトをハ及ワび腹ハラを切キりしハ豊氏トヨウジ尤モトあり

てゆるスるハ仕シへ居イるハ同ドウじニ立タて

のハ養母ヨウボを打具ウチグして又マタ出奔シユボシしハ加藤カトウ

清正キヨシゲは五百石イハヒトイソクより仕シふ豊氏トヨウジかまハはまハりしハバ落ハぶハる

年月トシノキをシるハ外ヘ舅ケイ中内ナカウチ惣ソウ左サ兵ヘイ衛エイとシるハ者モノ豊トヨウ後ゴに有アリ

てまハりしハ中内ナカウチ長曾チヤウソウ我部ガベが長臣チヤウジンなり大坂オオサカの事コト

起オキるハ及ワび長曾チヤウソウ我部ガベとシるハ大坂オオサカより

三九郎サンクウロウも打具ウチグしハ元親モトチカとシるハ二ニつハ分ワけ國沢クニサハ掃部サウボウ

と土方ヒノカタよりシるハ三九郎サンクウロウ此時コトキ六ム左サ兵ヘイ衛エイとシるハ五月イツゴ六ロク日ニチ

は矢尾ヤヲの堤ツツミ森モリ有所アルとシるハ向ムカて押オシしハ時トキ朝霧アサギリ海ウミ物モノ

色イロ定サズむハ森モリの南ミナミより紺地コンヂは白シロめハち付ケる

をシるハ立敵テキ空ソラ来キタるハ堤ツツミをシるハ引ヒキかケる

立タるハ敵テキハ藤堂トウドウの先陣センジンより旗ハタを堤ツツミの下シタよりおシる

次ツギを見ミるハ敵テキハ逃ニグるといハひく馬ウマより飛トビおシり突ツキてかケる

を元親大音一ツ槍を横に持引付て突崩し一人
もみぢりふかざるべく下知し十分敵を引受一回
どつと起立く切崩し追討よりなる西は渡邊勘兵衛押
来る六左衛門散々戦ひ鎗もゆがく後ハ敵の鎗
を奪ひくちをさうたけをかくる西は元親先陣敗北
掃込も討ぎ大坂の諸陣皆やぶらうく三里計の間
援くべた味方もなく元親も久寶寺をさうして引退き
くふ勘兵衛志しひ来り鉄炮を拵かくる三里の間
く旗竿も折多きども旗ぎぬハ一ツも拵むれ
ちぢりせて城よりを帰せり落城の日元親僅に士
十二人打具一ハ幡の方又落しり六左衛門も従ひふ

元親汝等とく是よりたのひくは落よとつども
までも附そひ申さんといひたるを元親志ハさる事なれ
ども遂よこが為よよりさる間落よといひりハ中内
一人もあわく其餘ハ落せり六左衛門其子孫今
池田の家は仕へくは

○東照宮岡山は御着陣の夜小栗又市露は濡て御前へ参
谷々心元あく存打廻り足ては上方者何のふだてある
と申を召井伊兵部は下知し宵より菅沢次郎右衛門を
もうが谷々見て帰るとやとつると仰りり

○関ヶ原の時 東照宮岡山は御着陣を秀家見て敵の陣
形あさぬは夜討せんといれり三成かゝる大軍より

夜軍ハ利をたりのなりとてやみくもを秀家後まで悔
まよしころもとうや

○関ヶ原の軍はあ九月十四日浮田石田軍をわし一色村を兵を
伏せ株瀬川を渡り中村式部少輔の軍兵北陣に押寄せ
鉄炮を打つる中村が士竹田五郎兵衛先がけし打つ
出る有馬豊氏も陣所相なれば兵をわし竹田討
死し伏兵は射あつたまされ敗北し中村が士大将野一
色頼母白あかけ栗毛ある馬は崩れ味方をあげは
返り合せしるは藪内匠引て通りしを河をりけ何とて
返り合せざるやといふを藪ありかへり手負しりて川を涉
りて藪ハ鉄炮はあつり馬より落しりしを其組の士松村清

頼母が上帯を切り刀脇指をりり退きたり其後富村
り老頼母が首をとる

其前の日野一色藪二人國清公福島正則等の諸將れ前
へ出岐阜攻落され功名致さるべきやうもあはれさる此よ
アハ中村が老ども軍始仕らんといひるるは軍始ハされく
どもがころびたうりいれざる事をいふとて不興なりし
其中に正則目を見ゆ怒らまを左松のも仰らまを
さるがころび大夫殿のわし付羽織のうしう紋をかんち
しる事もありき式部事太閤より以来先陣を勤め何そ
の軍も功名とげいとかくはらまの川をり御目おかげん

といひし我

浮田石田等が軍兵競ひうれば矢野助之丞金の團扇此指
物林文大夫を赤ぼらかけく二騎面もふらかけ向ひ進
む敵を追遊し有根目を驚らせり赤坂の御本陣より
御覽せし井伊直政本多忠勝は御下知りく人数を
まよめし此を株瀬川のせり合しといふ

○株瀬川より三成が兵勝よあて進むる有馬の士稲次
右近鳥毛の半月れさし抱めく殿を横山監物といふ
三成が士池あて引組し稲次が後者助け来り横山を引伏
し如く敵走りし稲次が由をこり引仰く稲次より放
さんとき時従者又助け来り敵を一太刀斬るかゝる如く

堀尾忠氏のあらし者せめて誤て稲次が手の者を切伏て
首をえ稲次ハ終は横山が首を取ら敵をも打取て馬を
静よあめしせく 東照宮の御陣所は参りくるを御覽じ
て先は此陣のかゝり敵は向ひし武者功名しし
誰が老と仰有し有馬法印かゝり有て豊氏が子の老
よてんとし稲次首帳を記して行く従者を味方討
おせし其首帳をバ消て送りしと云声を聞し名何事ぞ
と問せぬバ子細をゆかゝる大軍のみご合し戦ひよハ
味方討もある物とぞ仰らるる

其後稲次は八六千石禄増典へらまじ八十五才嶋原の城攻
よ討死せしとや堀尾のあらし士ども味方を討する者と

同ドくほろ預り居んる口惜とせしうバ忠氏の父吉
晴是を家彼士をばちるを取返して別弓の足輕二千
人預けらまじり

○浅香庄次郎後左馬侍ハ奥州葛西大崎の木村キアラに仕へ其頃関白秀
次の不破萬作蒲生氏郷ナゴエサンの名越山三郎トモと共々天下テカに聞え
しる美少年ビセウネンたり木村家滅て石田イシダに仕へしり外ウチ口カウラを
る事の有りし株瀨川ケセにテシカバカバの皮比羽織キギンを足銀オホの大釘オホの
立物打タテモノしる曹カトあしく中村ナカノムラがむね此士梅田大藏ウメダが首クビを取
大垣オオキよむせ帰カて三成スミヤ隅矢倉クマヤクラに居キし下シタにゆゆしく勘氣カンキを
ゆるさすまじりくと呼ヨバしる三成スミヤ固カタく能ヨクくそ軍志イクシし事コトといひ
りまじり又馳セ行ユキく三成スミヤが軍兵イクシを引揚ヒキアゲしり後ノチハ加賀利常カガリツネハ

まのうらまじり奉公キウコウしり

○林半ハヤシハ美濃安八郡青柳村アヲヤギの百姓ヒヤクシヤウたりしが石田イシダに仕へて
祿七百石使番ツカサシきり石田兵イシダヘイを起オキすの時佐和山の城中サワノに軍
兵を集め書院シヨインにキヤウレイく饗礼キヤウレイを行イひ吾ワ今イマかゝる一大事イチダイジを思
ひ立運オキトビを天命テンメイ小任コニするといふも汝ナシきもちが武勇ブユウをとおとよ
頼タノシむまじり其旨シメを存ゾクして軍忠イクシあしは賞シヤウハ功コウふあふべし
其約束シヤクソクの印シロシとて酒盃サカヅキを座ザの中央ナカウラにカしり時林遙ハヤシの末
席セキより進スまじり軍イクシに陪ヘイして一番イチバンハ急イシに二番ニバンハかくや
半ハ分ブンとまじり召メカまてよとて其盃サカヅキをとりく飲イるれを
皆ミナゆるたふるまじりよといひが株瀨川ケセにカしり一番イチバン首クビをとり
ぬ斯カクしく両軍リヤウケン物モノるまじり時稻葉助之丞イナバノタケノサネハ金カネの切裂キレの指サシ

物あり、秀家の軍士に殿し、林ハ白ぢぢる人のさし、物指て急
さがり殿し、ろるが、摺も本多忠勝が兵に向て、只一騎輪をか
くる有様敵ありとも、必ハかざる体ありしと、東照宮御
覽し、てあつても、不敵者哉、武功は志願者ハあめ武者の草
摺をいさげと仰有るなり

○関ヶ原の軍北、お日伊藤長門守至孝、大藪の陣所、石田使
を以てとく、大垣に入、一戦したの、ま、下、の、こいひ、送、り、バ
至孝、大垣より、西を、徳永左馬助、壽昌市橋下、総守、正舒志
し、ハ、多、ふ、伊藤、金左衛門、紫あらし、蛇の目、此紋、付、る、を、か、け
三宅平大夫と、唯二、騎、殿、し、ろるが、十四五騎、外、追、か、け、し、り
伊藤大喜あけ、大事の殿、勝負、な、せ、と、と、云、く、引、退、く、三

宅ハ馬より下立しが、関の聲、馬ハ口は解、下人を
ふみ倒し、そ、か、け、出、し、ぬ、歩、立、よ、ぬ、く、静、退、く、日ハ暮、し、
ま、か、る、ま、よ、正舒の、兵、市橋、勘、九郎、門、追、つ、ろ、く、初、を、か、け、鎗
を、合、せ、ん、と、を、し、に、三宅とハ昔より親し、く、除、り、り、ま、ハ、互
よ、その、あ、る、を、聞、知、く、夜中、誰、も、知、ら、ず、ま、よ、行、あ、ひ、ぬ、る、と、し、
幸、な、の、ま、よ、ま、よ、戦、あ、し、り、何の功名、有、べ、き、い、ざ、と、立、別、を、
り、り、至孝、大垣、入、り、く、三宅、ハ、討、ま、し、あ、ん、と、を、し、む、ま、よ、
帰、り、来、り、し、ま、う、く、な、り、と、い、バ、至孝、悦、んで、鹿、毛、あ、る、馬、よ、
よ、た、鞍、置、く、興、へ、三成、ハ、黄金、三十兩、引、出、お、ま、ぞ、志、し、り、ろ、
伊藤、ハ、十六七、の、ろ、後、よ、ア、功名、あ、り、し、赤、き、ま、ぬ、ぐ、ひ、を、鉢、
先、と、ろ、ま、ま、敵、例、の、赤、ま、ぬ、ぐ、ひ、又、出、し、ろ、と、廿、よ、い、れ

一者なりある時軍破まて川岸を只一人引退く時餓疲
まてるも敵一人腰なる兵糧をきふをかん走とあつて斬伏せ
腹をさわく飯を取や川水よひひく洗ひくお喰ひ陣
所よ歸てとるとなり

○関ヶ原より諸將物見をおさまりし馳歸アて敵或ハ八九萬
又八十萬計もゆるんとりふ所は黒田長政の物見、毛屋主水
敵ハ一萬よもるにりとりふやごとく 東照宮の御陳所不
集くやせば敵ハ大軍あるまゝ汝が弱くあやられと仰られ
一うバ主水兼て凡敵ハ七八萬のゆるらんされども兩軍の勝
負を計ておのふはよく軍よ志ん兵ハ幾程もゆるん石
田小西才が頼切くる老ども彼是合せり一萬計よるふまじ

一陣敗北せば餘ハ戦むべしとて敗まらんべしとやけるふ 東照
宮主水ハ敵の内通を知りしや軍の情よよく通トくるよと
感トさせし御手づくる饅頭を賜りたるをそふと檀よ有
て此を食してゆるる後彼ハ本姓ハ何とつるやと仰有れば
かへより毛屋とやけと申せばいやよ北國の毛屋といふ所
よて功名せしゆゑ毛屋と姓を更つるよとけりしと仰有るり
主水もや山崎源太左衛門よ仕へ後黒田家よ奉公し朝鮮
よて平安道の小川を渡せし時味方ハ過小渡せしやと
云くるふ主水味方ハ川上をよるよ子細ハ馬の沓ち鞋の流
まてるあよあつふといふハ長政尤ありしとて渡さるしとや
主水後千五百石の禄なり此時ハ旗奉行しりしが合渡の

軍小いよりより人長政の旗志よりよりぬ一時主水馬より
飛下と鎗の鐔を以て旗竿をうつむけ汝等のみ旗を仰
けあば忽切と控んと下知して山石巻とつる旗さの強力
の考は取分るかて戒め主水もえいしくと聲をかけた押
立より又関ヶ原より長政の旗車はあより立よりはれ長政
あとの高た所より立よと下知せしる主水進んぶる旗を退
わどちあは敵は勢ひを付ひちんとて遂は旗を立盡さば
長政後より此二事を賞せしむるなり

○黒田長政ハゆゆより石田と不和なりしは関ヶ原合戦
のあさむぐり立しる十五騎明日の軍はぬけ候とて
吾馬のどりより引しむく軍せよ石田とよをえ組て討らん

と用意せしむるより石田が陣の前は柵あり、嶋左近昌仲尤
の手は鎗をとり右の手は麩毛をとり百人計別具し柵より
ゆくるは柵隙は残り静に進み懸りたり長政馬より下
立鎗を提てゆみ合しる處小菅六之介政利より高き如ふ
上より五十挺の鉄炮を透間あり接合よりせしむる小菅先
進んぶる敵手負く尤近も死生ハ知れど倒まりはひるむ
所を長政とつとわたり切りつるさまより尤近ハ肩おりけて
そとを退ぬ菅後より六千石の禄賜より和泉と称して長政筑前
の國領せしむる後関ヶ原より撰はあひ長政のかへは有る
軍よりくる人々集りて閑話しるるが石田が士大将鬼神をも欺
くといひあはる嶋左近が其日の有様今も指目のあはる在り也

と云々其、物具の事をいひゆ〜更サラは定サマりたる人々
口々クチクチといひ〜は其、軍は石田が方カタは有アリりたる士の筑前チクセン小仕へ
々々を三人呼ヨビあさう、問ヒはるる、八ヤチ近チカ曹ソウの立物タテモノ、朱ニ天テン衝ツキ溜タメ塗ヌリ
桶ヲケかば、羽ハの甲ヨロヒは木綿モウジ、浅黄コサキの羽折ハオリを、忌ヒり〜
ま〜近チカ〜と、はめ、あ〜小見ミ覚カえ、さる事コト能ヨクく、流ナ〜
口クチ〜事コトなりと云〜小、其中ナカは取トリ〜剛ガウの者モノ此ココ云々ハ
見ミき〜ハ、れ、あ〜も、こ、日ヒり、裁カ左サ近チカの引ヒキ具グ〜ハ
皆みな〜物モノ〜七十ナナジウ討ウチハ、柵サクキ際キは、沙シ〜二十ニジュウ計ケイ左右サウヤウは
立テ〜毫サウを取トリ下ゲ知チ〜有アリ根ネは〜と、案ア〜小、三十サンジュウ人ニン討ウチの
兵ヘイも、鎗ヤリの合ア〜際キは、と、引ヒキ取トリ味カ方カタ〜追オ〜
を、近チカ〜引ヒキあせ、七十ナナジウ人ニンの老コ〜も、さ、い、〜揚ア〜突ツ〜

の下シタ追オ崩クツして、残ノコ〜討ウチ〜人ニンとの、今イマ多タい
知チ〜六ロク誠マコトは、身ミの毛モウも、立タ〜汗アセの、酒リウ汲キ〜は、
心ココロ安ヤスき、朋トモ友トモと、物モノ語カタリ〜ハ、大オホ〜人ニン〜大オホ〜目メの
き、〜ハ、失ウシ〜小、若ニ其ノ時トキ横ヨコ合アより、鉄テツ炮ポウ〜打ウ〜
め、〜ハ、首カハ、左サ近チカが、鎗ヤリ小コ〜、見ミ〜
と、〜必カナラ〜恥ハ〜あ、〜と、〜ひ、

○関ヶ原セキガハラより、飯尾イヘヲ甚タガ大夫ダイブ、安ヤス信シノブ、只ただ一ヒト騎キ、志シ田タ長チカ政サダの陣アレイは、
馬ウマを、乘ノリせ、大オホ音ネあ、げ、く、名ナ、益マス田タ興キヨ、只ただ一ヒト騎キ、先サキ、
の若ニ者モノも、進ス〜を、野ノ口クチ、益マス田タ興キヨ、只ただ一ヒト騎キ、先サキ、
〜心ココロ昔キナを、一ヒト谷タニの、木キ戸ド口クチ、熊クマ谷ヤ平ヒラ山ヤマが、終オヘ、夜ヨ
名ナ、兼カ〜体テ、平ヘイ家ケの、士サ、合ア〜志シの、老オ〜助タ〜

横へく制しければ飯尾度々名をかく馬を引取らるる飯尾
ハ豊後國富来比垣見和泉守が兄利右衛門が子ふて五千石の
禄よて秀家小奉公一居しと云

○ 株瀬川の軍は中村北士成合平左衛門利忠牛の吉れり
物少く真先かげしを飯尾討取り其後愚田家小仕へ
千石の禄銀預り小長政成合が首取りと云彼成合ハ
世小かきさちた勇士なり其首を取るといふとて二千石
増興へられしとて成合も中村家の士あり天正年中
秀吉蒲生氏郷木村伊勢守秀俊小奥刈敷十方石賜り
さるる兩家とも士卒の少きと困りしとて秀吉下知して日

本國中の士主人不足ある者た或ハ主人かまひ有面々
皆兩家より禄を得べし主人咎めば秀吉相争しと云
と札は書て立ちまじり成合ハ和泉小本川の一番鎗を合せ
秀吉の感状賜りたるも一氏よりぐら三百石あると云
故木村が許し行く三万石佐沼の城代しと云木村が家亡
びく後復中村が家よ歸り仕へ株瀬川まで討死しと云

○ 蒲生備中真令ハ石田が内みくゆゆる勇将なり関ヶ原の前
軍評定の時真令明日ハ偏み必死と思ひ定めらるるべしと云
嶋左近明日先陣に進んで忠義を曹とて打勝ぶたおと
いふと真令まじり昔より利を得るハ天のたまひけりよるといふ

とも軍の西へたると法令の厳しきとの二ツは有りよく内小省
しも人偏は必死と云ひ定められバ勝の半なると一にありは
ハ復御目見致さしとて座を立ちたり真令元より敗軍をさ
やうく三成は必死を究めし詞をせしり斯く関ヶ原ゆく
只一騎三成が陣は毎夕く何事わういひするふ三成うちうな
はく真令弛帰と競ひかゝる敵小向ひく散々一戦ひるるが
織田長益は合く昔ハ蒲生の家ゆく横山喜内今ハ石田
内ゆく蒲生倫中とて人小急まざる者なりといへバ長益神
妙ふんりしは降参せよといひも終らぬよこハ何事ぞやとて
お打は斬く打落さく長益の従者千賀文藏鎗を以て突
通を其柄を握り引組するふ文藏が弟文吉刀をさう速し

真令を刺て遂は打取たり真令が子の大膳ハ戦ふ半小首
提て父は見えまじバ功名も何よせんといふを聞又東小向ひて
押くる敵小かけ合せんとせしが父討まじりしは

まそ志はり我そらうて三ヶ淵川あさみ海と君お志らせん
とつ哥を高らうふ唱へ自害しせり大膳幼より戯を好び
関ヶ原小出陣の時母は汝が富貴を願をぬよハあぶられも
弓矢の家はせりハ昔より名を重んずる習ひなり凡
物二ツハ兼がく身全うして名を忘まよとハ云べくは
いひらバ父と共に死して母の戒はせらばざりたり

○越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆ハ會津征伐は従んとて
兵をせきさんとせしに石田三成より榎原彦右衛門を使ふ

て志願ひく佐和山の城に來らまはしは蜜は評議をすべき事有
○と云せらるるは此ハ心得ごとくいへども是非を論せむはひけ
まは止事を得むく佐和山よるる三成悦で今度関東
を討亡はべき謀をぞ語らるる大谷驚て故太閤常は徳
川殿の智勇に備はるるを崇敬おこしやうは今徳川家を
打込ん事おひひもよくびといひまはしは三成我上杉景勝と討
て系務旗を揚らまはしり其約を変て景勝一人を攻殺
させん事本意は非びて運を天命は任むるの外道なり豊
臣家の恩を厚く蒙らるる身なまはしは秀頼公の御為にか
く一大事を思ひ立らるるごとくなど豊長公の恩をこそすれ
らまはしやといへば大谷さるるバ力なり命を秀頼公は奉りて

今度の軍に討死を免れ但かゝる一大事を思ひ立らまはしは
思慮をなした事二つ有申せりて人用ひらるるやといへば
三成はた所存を防ぐべしと悦らるる大谷が曰世の人石田は
をば無禮なりとて末をよ至るもろくろよかゝるいひのへり
江戸の内府は只今日本一の貴人あるまはしは卑賤の者よ知るま
で礼法あつく仁愛深し人のなつて従ふ事大方なりは是
一ツ次は大事ハ智勇の二ツありては受け得る石田はま
智有て勇足ざるうとほむ今度毛利浮田も皆かりは同意
しるる人々なり必しを頼とすべたまはしは水口の長束
と討て内府関東へ歸路の時石部ありては旅宿の時夜
討して火をかけ十死一生の軍せば勝利疑あるまはしはあはら

圖を外されぬ内府関東は歸らざるハ虎を千里の野に
をならしめ如し十全の勝をえらるまば又圖をたづぬ
悔むも益ありト此上ハ命を秀頼公は奉るの外他の道な
し士卒ハ皆平塚を下知せさせしめりバ其志計がごとしと
りどもよも別の事ハムドとして伊益の驛に至り平塚は告
るバ平塚大は落し三成志大なりといへども大軍を率
てんは將畧たなり然るもふかく興せしめしハ禍をまひ
とつて一はたしども既は許諾せしめしバいんとも
まべりくべとして三成が送て来り使者ハ心得ぬと我
答へたる吉隆敦賀不降し不関東勢岐阜を攻落し
つて敦賀を打出し関が弟より一は秀詮の裏切をのぞ

より悟りたれば僅小六百餘の陣を一手にたり関ヶ原は
おし知し鎗食を作して秀詮に向ふ吉隆ハ目を病て士卒ハ
皆平塚を下知せしめ練絹の小袖に上小村蝶を墨して書
しる鐵直岳を忌四方取をれしる竹連ハしあしむる秀詮
裏切して付くかられしるバ大谷齒をかき秀詮の不義骨
髓を徹せり敵の旗本を目小かけく切し入登しと下知し
くまバ木下山城も大谷大學戸田武藏守重政平塚因幡
為廣くあを最後と思ひ定め面もあはせて切しめしる
ハ秀詮の先陣立足もなく敗北してしるも藤堂高虎を
始め東國北軍おしりけ進み来しバ秀詮の先陣あり
死狂ひしる鋒先は秀詮の先

陣又建立らまじり為廣敵あまき討どり其首を吉隆
一送り此首自ら討取以冥途のつとふ糸くせん日比の約
束只今討死しゆひたんとく自害して人あふれぬまじ
と云せハ外は歌一首書添しり

名のさ先にまじり命ハ惜うじつひよまぬうた世と心ハ
一説は秀詮の士横田まふを討取其首を吉隆に送り

吉隆使小向ひく武勇とりひ和歌といひ感ぜまじり
とや自害して退付再會まじりと答へく甥の祐まといふ
僧小を書せし使小渡しとま

あまハ六のちあふまじりまてあれ先つるふあま

かくく平塚ハ戦ひあまきく畔ハ腰うけ息つぐ如よ小川土
佐守祐忠が兵挫井太を衝鎗を提歩まある平塚立上り
我ハ平塚因幡守なりとて散々よ戦ひまが終小倒しとな
かく十文字の鎗を投し汝が重宝よせよとて討まじり
戸田重政もあまき切きり討死しりりまバ大谷が軍
敗まじり吉隆自害しりり行年四十二歳とちや岩佐五女
首を羽織よ包く其邊の田此中よ埋く先手よ向ひ討死し
くを藤堂の士大将藤半之仁右ま其首をとりて御旗本
よ奉アまじりま 東照宮五女ハ聞ゆるもの之缺唇たる

○滝川内記辰政ハ左近将監一益が末子たや秀詮よ仕へく

松尾山より秀詮の軍敗北は時いさみかぐる敵を支へく
従者首五ツやうらせ秀詮のめく持せやり其所をきこで
吉隆が兵は鎗を合せ岸より下は敵を突落しし山田
喜内其首を取敵なを競ひかくりたるを笹地兵庫と俱に
散々戦ひく首を取る後池田の家は仕へく禄三千石
士大将より此軍の時北四五計の年少や

辰政其始織田上野の信包は仕へく十六歳の時小田系
の軍は信包織田常真の對面せんく後者を遠ざけ
辰政只一跨を具しとおもむるまきり江川の丸より
横筋くひは鉄炮をおかく辰政信包の矢面は乗ぬ
さぐりくゆゑあつは鉄炮の玉三ツあつは信包大に感

賞して勝ぶるをあへらる辰政此時七郎といひたり
池田家は仕へく丹波と称し又出雲と改む

○関ヶ原の戦ひ九月十五日辰の刻るまでハ 東照宮挑配
は御旗を立ちまきつる所は本多三弥正重来て今より先へ
御旗をすめあひあつるべし是ハ敵合遠しとやを聞き召口
もたの責ある男といわれざる事をと仰々まは三弥御
後の方小忍り口もたハ其あるまもせよ遠きは遠しとひら
ぐとやかり

三弥ハ佐渡守正信の弟く若たは武者修行して
功名あり長篠の後ハ瀧川一益のありし軍
よや諸浪人皆をくた有し三弥多しあはかりく

一益カヌメスさしあつてもちよき高カタ人の今日ケタ此事コトハハハ小と云此コト
 ハ明日ミナコノ日ヒをてして其ミはげの目メ首ウヅ二つとりて昨日キノフの答コタヘ是コトあり
 として甚シマシ風流フウリュウを好ココロ物モノ教シ育カいやりげなる事コトたなく
 常トキ小身ミ又タキ薰物イノモノをとくつり前田家マエノタケもも志ココロむココロなく有アリ
 慶長元年伏見フシミより 東照宮小仕マエノミヤノコシへなりたるモミ以モの外ハ
 小直言コナカクハシある人ヒトたり或時幸カズマシ若カ八九郎ヤチヒチノラウを召ヨシまゝ高館タカノシの舞終マヒノハ
 了マツルく後武藏坊ムサシノボク辨慶ベンケイハ世ヨ小コまてぶれスる老シヨあり今イは世ヨ
 なりとベしと仰ホ有リ小三弥コサンヤ兼カシりて今イの時トキ辨慶ベンケイハ有ルべし
 ども判官ハツカミに似カタる主君ミヌキのなまどと申マツせしコトなり大坂冬
 の陣マタクサ 台徳院殿ダイトクインノデンに仕シへなりコトなり 東照宮三弥トウショウノミヤノサンヤハよ
 くまひる老シヨありと仰ホられコトなり其ソノ後ノチ一万石マンカク賜タマフたり

東照宮御前トウショウノミヤノゴゼンに召ヨシ出デされしコトは思慮シヨのゆるやんぐを
 ぞりたつてすねたるよりサよりと仰ホ有リられ三弥
 將軍サマ様ハ仕シへなりコトなりと申マツせしコトなり主君ミヌキ小コすも老シヨと
 きらりひよコトをゆへと申マツせしコトなり又マタ持病モチヤマイありしコトなり

と笑ワラをせぬひヒたりとぞ七十二歳イセ元和二年ワノニニ病死ベヨウシせられしコトなり

同日イツジツ時祐筆イウヒツク握カサ左馬助サマノノサマノノサマかウく御書ゴカキを九月十五日クニイサヒノヒの日ヒ付ツく
 今日ケツ巳ミの刻キコト御勝利ゴウウリと認タマシ置ツたり 東照宮御感トウショウノミヤノゴカン有ツて十五日
 と申マツせしコトハ尤モトモちシ己ミの刻キコトとハいふコト左馬サマノノサマ今イ兼カシり敵タリハ大軍オホタマ
 なり己ミの刻キコトをシるコトハ御敗軍ゴウノノシと存ゾシりたコトなり

左馬助サマノノサマノノサマハ上田善四郎ウヘノタヤシノシロウと四男シヨノヲコ少シく禄ロク四百石ヨウヒヤクシヤク後千石ノチシヤク賜タマフたり
 て御使番ゴシヨバシたり

○田中兵部大輔の士田邊甚兵衛十四歳より関ヶ原に公從者敵を突伏田邊を馬より抱おとす首をこぎせしとて幼少より武功世は名高かりけれハ黒田長政田邊より賞て大小感賞し田邊をどうくひする從者を呼出し其事を向ふふ馬より抱おろし刀を抽出おひきまは恥ぢめく首を取らりと云長政さてハ勇士たりあはばおかりさるバ十方あきあとしのべし聊めらまて首を取るハ勉めらげまはよりく勇氣を致しおなりとて弥々めくまきこらる

○辻小作ハ福嶋正則は仕へしが可兒才藏と親しく共に世小作えく物たり中黒道隨ハ石田賓客の如く

りてなり一盃入り関ヶ原の軍敗まり時中黒唯一騎落初兵の中一踏止ましんく小戦ひくを辻見ていさ付らむやといへハ可兒なるけあは事をもの裁まをけむやと云辻さてハ生とまことや可兒は好まれて辞し難といひすとて馳初るも中黒馬を深田小打入く諸鎧を合せて更し動は辻刻をうけ日頃のよみ小助んままは早く取付く鎧の縛をさし中黒かきまは命助りても何みせんとして既ハ自害さぶく刃をくは辻何とたバくまきや神明ふけくいつちとといへらぞりつきく辻主後引あげ陣所は歸る可兒見く大は脱びりさて辻ハ物具脱て躰より仰は打目く

只今まで敵なかりし中黒を物とも思はぬ有様まで物語に
中黒あらず不悔アツクよしと心中よりいりなすも命を助
けしうり恩を思ひくさてやせぬと後中黒此事を語り
て愛ひしとなり中黒後井伊直孝招きて禄二千石ありと
らまごり

或説し丹羽山城谷少羽篠野才藏稻葉内匠中黒道
随渡邊勤兵衛辻小作兄弟の約束して武勇を勸
天下七兄弟と云いといふ

関ヶ原の軍破まりし時鳴津義弘真丸不成て福嶋刑部少輔
正武の陣れ前を切抜んと一文字は折通る正武十六才かけ
合せんとする知を梶田又右衛門死狂き敵軍ハせぬよとて

追留より東國勢おしかけし久義弘の後子中務大輔豊
久義弘の馬れかへし乗あつくさやく体なりしやが
て大敵おかけ合せ討死せし義弘今ハ是までたかりとて取て
返されりよ阿多長壽入道成淳義弘の馬れ前よりあき
がり大将八千騎が一騎はぬても死せしめて謀をめぐ
しを道しとすきとく打破アツク引退たぬとといふ
まゝ小馬の香を引直し鳴津兵庫頭最後の合戦をする
そと呼りしさんく不戦ひく討死しり成淳が義弘
よめしふし止り支へ我ひ討死せし者多かりたる其ハひま
義弘又士卒を集め列を整へ引退く時松平忠吉井伊直
政あまのすしなるとて追うけしり義弘が兵ども種々鳴の鉄炮

を腰に挿し、を抜き、ひらりと折返り、打ちけり。忠吉直政共、負くそれより、おとまりし。

一説は本多忠勝追うけし、馬を鉄炮にてうせ、馬より落し、金平純来り、おのぐる小忠徳を奪ひ、其奥

島津が軍隔るといひ、又河上左京が従者柏田源藏が、うちらなる鉄炮は直政中る、又松田某といひ、鉄

陣の時、連て帰る、小児の成長し、を組ひて有る、麻の角れとて、物の曹とて、兵初よ、お留し、と下知し、これ

バ鉄炮をさし、向し、直政眉尖刀を換し、馬を奪ふ、けし、彼兵松田某と名乗る、おし、眉尖刀お中り、

其玉腰骨おかすり、馬より落し、おとまり、亂鎮す、

て後薩摩のむら、直政を饗せし、直政松田を呼出、盃をさし、関ヶ原より、既死すべし、

幸また、今日對面する事を得し、といひて、後日、片足をたやみぬか、武功の人、小禄こそ、不足より、今

日のむて、あし、禄を増え、いし、彼物頭後、直政の呼出、對面、及び、時のめい、

一生は、覺む、といひ、

義弘、近江の甲賀より、老翁一人、案内者、して、そ志、せ、伊賀の山路を、上野まで、行、

守定、次、城なり、使を以、嶋津、義弘、唯、今、お、と、送り、野武士、四五百人、を、待、

義弘物の数ともせむ打破王二人生捕ぐ上野小立歸り大
手の柵れ木よかめ付、さくそまふり、奈良よかめ老翁小
ハ刀よさし添らまひ、赤銅の斧をいひ、此をまひ、必薩
摩よ来まじ、今度の旁よ報せん、とく大坂よ至り、船よ鹿兒
島よ歸らまひり

一説よ尤近丞と云姓薩摩よあり、是ハ慶長の比大坂此商
破らして後義弘大坂よ着まじ、士一人先をさかめ商家
よ行、バ彼商待、びり、体よく、君ハい、お、の
ゆと問ふいごとよ、討死あり、と答へ、ま、商家、破
流、年比厚恩を蒙、事なま、巴関ヶ原破、ぬ、と、関

より必爰よ、せらまんと相計、て、船を設け、
待居、ま、か、ひも、た、く、口惜き事なり、せめ、御佐、
ま、んと、水中よ飛入んとせ、を、留め、今の時、れ、
人心のま、り、難、く、かく、い、ひ、あり、実ハ一方打破、
爰よ、お、い、せ、ら、ま、り、と、い、む、かく、難、く、ハ、恨、な、ま、い、も、そ
ま、を、云、ん、ハ、時、移、る、べ、い、く、舟、よ、の、せ、ら、ま、ん、旅、を、こ
そ、と、い、ひ、も、終、ら、ぬ、義、弘、来、ら、ま、り、ハ、酒、樽、を、積、其、間、
よ、か、く、の、せ、其、身、も、付、添、く、直、よ、薩、摩、よ、赴、一、其、者、の、子
此中一人薩摩よ仕へ、其子孫なり、といひり

彼老翁薩摩よ、行、ま、や、と、お、い、ども、道、遠、な、ま、空、く、色
し、程、短、く、人、小、い、ま、ま、鹿、兒、嶋、よ、い、く、斧、を、知、り、け

百枚あるといひし人もの黄金はあつて興へく人を添
くおろりしをさすまじり

○関ヶ原の軍敗まじりば金森法印とく勝関の儀式行ハ
まじりばをさすまじり

をバ打破すまじりも諸将の妻子大坂上人志ちとなりて
敵の中よ有此を事故なく歸へざらん間ハ心安
んせぬ勝関をいふで行ふたと仰らまじりを聞く人愈感
服しるるを

常山紀談卷之十三 終

常山紀談卷之十三 終

